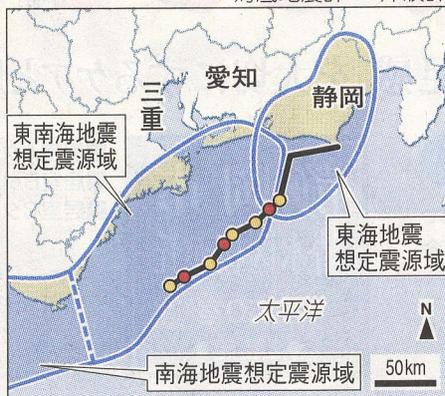


# 東海地震の発表迅速化 期待

# 海底地震計速報に活用

### 緊急地震速報に活用される 海底地震計

● 海底地震計 ● 津波計



## 2009年 東海地震 は今

気象庁は24日、本県が対策に取り組む東海・東南海地震想定震源域の海底に新設した地震計のデータを、8月3日から緊急地震速報に活用すると発表した。東海地震発生時に、揺れの直前に予想震度を発表する同速報の迅速化が期待される。

**Q** 緊急地震速報 地震の初期波(P波)を検知して、主要動(S波、大きな揺れ)が到達する数秒から数十秒前に地震への警戒を促す。震源から近く、揺れが大きい場所ほど速報から主要動までの余裕時間が短くなる特徴がある。主要動の到達に合わない場合もある。電車やエレベーターなどの自動制御に活用されるほか、テレビやラジオなどを通じて発表される。

## 気象庁「猶予時間」伸びる

気象庁によると、東海地震が想定震源域の南端付近で発生したと仮定した場合の計算(シミュレーション)で、従来に比べて、速報から大きな揺れが起るまでの猶予時間が4・1秒伸びる。静岡市では従来の10秒前後が15秒前後に、浜松市では3〜4秒前後が7〜8秒程度になるといふ。

気象庁は「東海地震の想定震源域のどこから地震が発生するかで猶予時間は大きく変わる。あくまで『南端』と仮定した場合」とした上で、「安全を確保する時間がわずかも伸びる可能性はある」と指摘する。

南海地震に備え、データ蓄積などのために昨年10月に運用を始めた。御前崎から三重県・志摩半島沖までの長さ約210キロメートルのケーブルに地震計5基

を設置している。気象庁は、マグニチュード(M)を推定する計算式が地震エネルギーを過小評価し、速報が遅れる傾向を専門家から指摘されたため、改良した計算式も導入する。改良した計算式は昨年7月の岩手県沿岸北部地震(M6・8)でシミュレーションを行った。当

時の緊急地震速報発表は地震波検知から20・8秒後だったが、これを4・4秒後に短縮できた。これらの改善点について県危機管理局の岩田孝

仁危機報道監は「時間の余裕が生まれ、速報の精度も上がる方向にあることはありがたい知らせだ」と評価する。その上で、「緊急地震

速報を有効に生かすには、速報発表からの短い時間にどのように対処できるかが重要。さまざまな機会に県民に啓発していきたい」と話した。